テーマ「他者とかかわる経験を増やし，豊かな学校生活と社会参加の可能性を広げる」

所属　京都市立鳴滝総合支援学校
教諭　田村裕司

本校は昭和 52 年 4 月に，隣接する国立宇多野病院（現：国立病院機構宇多野病院）に入院する筋ジストロフィ及び類似疾患の児童生徒のための病弱養護学校として出発した。そして平成 16 年 4 月の京都市の養護学校再編の際，高等部職業学科である生活産業科が設置され，普通科・職業学科併置の支援学校として今日に至っている。

現在，高等部生活産業科は各学年 3 学級で計 73 名，普通科は小学部 6 年生 1 名，高等部 3 年生 2 名，また一昨年度開設された京都市立病院内の分教室に小学部 3 名，中学部 1 名が在籍している。

近年本校普通科も児童生徒数の減少が続いている。在籍数が少なくなることで筋疾患の児童生徒とかかわる教員数も減少し，児童生徒にとっても学習集団の保障による活発な学習展開や，多様な対人関係の中で得られる生活経験や社会性の発達の面で課題が多い。

また宇多野病院の改築作業に伴い病棟と教室が離れたため，一昨年度から吸引等，常時医療的ケアが必要な児童生徒が学校まで来られず，病棟内の一角に設けられた「学習スペース」で学習することになった。限られたスペースでの学習の組織や本校で学習する仲間との連携，そして孤立しがちな分教室の児童生徒とも同じ学校の仲間としてどうつながりを深めていくか，等も課題である。

本校ではそうした課題に対して，

・生活産業科との学校行事や生徒会活動，部活動での交流
・本校と病棟内の学習スペースや市立病院内の分教室とのテレビ会議等による交流
・介護等体験の実習生への学生ボランティア募集活動，等

他者とかかわる機会を設けて，交流活動を広げ発展させることに取り組んできた。

そうした活動を通して児童生徒は，同じ学校・同じ学科としての仲間意識を高めたり，学習や生活経験の内容をより豊かにすることができた。また積極的に他者に働きかけたり，自分をアピールする力を高めることもできた。

この春高等部普通科を卒業したある生徒は，卒業後も療養介護を受けながら入院生活を続けるが，高 3 の時に進路見学・進路実習でお世話になり関係を深めることができた就労継続支援Ｂ型事業所と，卒業後も請負委託契約を結ぶ形で仕事の関係を続けることができるようになった。自分の夢につながる社会参加の可能性を一歩広げられたのではないかと思う。

少人数の普通科の児童生徒の，学校生活の内容を少しでもより豊かなものとするために，そして卒業後の社会参加の可能性を，本人の夢や希望を大切に，個性や特性に応じて切り開いていくために試行錯誤してきたここ数年の本校の取り組みを紹介したい。